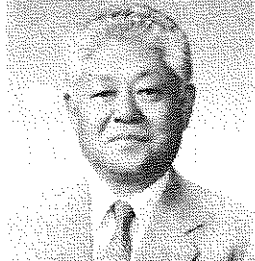


栃木県中学校長会報

全日中のこと等

63年 3月31日



栃木県中学校長会副会長
宇都宮市立一条中学校長
柳田 明

私は、本会の副会長をやらせていただいております。前年度事務局長を務めた関係から、本年度当初、2、3か月間、当

時病休中だった田嶋前事務局長の代行もやりましたが、6月半ばに前原現事務局長に引き継ぎました。

会長の代理で、幾つかの会議等に出席したり、県教委・県知事部局・県議会等への要望書提出等の際に、会長に何度か同行したりした位の仕事でした。皆様方に、特別御挨拶申し上げることもございません。そこで、私が全日中幹事として給与対策部会に所属しております関係上、その活動状況等をお知らせしたいと存じます。

1. 全日中給与対策部会の活動

5月以降、数度に亘り、東京・国立教育会館の会議室において、部会が持たれ、討議が重ねられました。最近の部会の内容を説明いたします。

(1) 健全育成指導手当(仮称)実現を期する。

現下の中学校において、特に生徒指導等のために時間外勤務をしておる教職員に対して、時限立法でもよいから、標記の手当が支給されるようにするための対策を練ろうということが進んでいる。

① 10月27日の部会では、委員の各校3名ずつの教員の勤務実態調査票(10日間)を集め、集計作業をした。1人平均30.9時間の超過勤務であった。

(今後の見通し)

- 昭和61年度 本調査のための準備
- 昭和62年度 4月当初から調査開始
- 昭和63年度 調査の裏付をもって予算要望
- 昭和64年度 実現期待

② 12月2日の部会での結論

- ア 調査の範囲：関プロ各都県6校ずつ
〔大(24以上)・中(23~10)
小(9以下)、都市部・農村部〕
- イ 各校の対象人数：男、女各1名
- ウ 調査の期間：1年間、62年4月1日~

- エ 調査内容：1年間を1枚におさめる。分単位で記入。休日、祝日、長期休業を含める。
 - 生徒指導：生徒指導に関する会議、本人に対する指導、家庭訪問、関係機関への連絡、街頭補導
 - 部活動の指導
 - その他：学校での教材研究、諸会議・行事の準備等

(2) 人事院勧告 4週6休制の検討

本年度の人事院勧告による4週6休制の試行は、年末より行われるが、これを中学校教員にあてはめるとどうなるかについて、全日中会長からの依頼により、当部会で検討してきた。

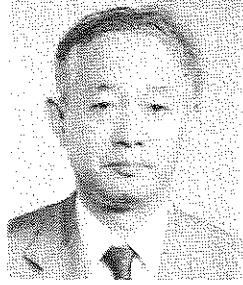
- 条件(1)可能な限り早期に試行を開始すること。
- (2)現行学習指導要領の下に行うこと。
- (3)1年52週で26回の土曜日が休みとなる。
- 話しあいの結果、望ましい順位をつけると、次の通りである。
 - 第1順位：教員隔週5日制-学校隔週5日制
 - 第2順位：土曜日にこだわらず教員のみ隔週各曜日に分散して休む
 - 第3順位：4週間通して1日休む
 - 第4順位：まとめどり

2. さざれ石

皆様方は、文部省の中庭に置かれているさざれ石のことを御存じですか。そのさざれ石の傍に立て札が建っていますが、その文面を転記してみます。

国歌に詠まれているさざれ石(実物は縦書き)
この石は学名を石灰質角礫岩と云う。石灰石が雨水に溶解してその石灰分をふくんだ水が、時には粘着力の強い乳状体となって地下において小石を集結して次第に大きくなる。
やがてその石が地上に出て国歌に詠まれている如く、千代八千代年を経て、さざれ石、巖となりて苔のむすつと云う景観実に目出度い石である。全国至る処石灰質の山に産する石であるが特にこの石は、国歌発祥の地といわれる岐阜県揖斐郡春日村の山中にあったもので、その集結の過程状態が、この石を一見してよく知ることが出来る。

所 感



栃木県中学校長会副会長
南那須町立荒川中学校長
高 沼 理 夫

若い頃、国木田独歩の「忘れぬ人々」という作品を読んで感銘を受けたことがある。

何年かたって、大学生となった教え子から、久しぶりに手紙が来た。

「忘れ得ぬ人という題で英文のレポートを書きなさい、と言われ、先生のことを書きました。」とあった。その時は、たいへん感動し、教師としての喜びは大きかった。

この間、本校で学習発表会をやった。あるクラスで、先生方のプロフィールと題して、先生方のイメージを模造紙に書いて一覧表にしたものを展示した。その中に「校長先生……健康でたのもしい」とあった。たのもしい、と書いてくれたのは有難かったが、一面で教師としての私をいつまでも心にとどめてくれる生徒は、果して何人いるだろうかというような考えも湧いてきて、たいへん心もとなく、一抹の淋しさも禁じ得なかった。

独歩は、「忘れ得ぬ人々」の中で、こうも書いている。

「親とか子とか、または朋友知己、そのほか自分の世話になった教師先輩のごときは、つまり単に忘れ得ぬ人とのみは言えない。忘れ叶うまじき人といわなければならない」と。

忘れて叶うまじき人、と言わしめた教師を、今の中学生たちはどのような眼で見ているのだろうか。教師という職業を、教師ひとりひとりの人間像を。私たちは、生徒ひとりひとりを細かに観察し、よく理解したつもりで指導にあたっているが生徒たちの、私たちを見つめる、秘かな、鋭い眼を、もう一度見直してみる必要があるように思う。

× × × × × ×

湯川秀樹先生の随筆に「旅人」という著がある。この本を読んだのもずっと以前のことであったが、その中で、次のようなことを書かれていたのが、今でも心に残っている。

「小学校時代に、校長先生から、いろいろな朝礼訓話を聞いたが、残念ながらどんなお話だった

か、あらかた忘れてしまった。その中で今でも強く心に残っているものに、次のような話がある。——ある時、いろいろな動物たちが、一せいに河を渡らねばならないことが起きて、動物たち、それぞれに自分なりの泳ぎ方で、あるものは力強くあるものはスイスイと、向う岸をめざして泳ぎ始めた。しかしその中で、象だけは落ち着いて、一步一步、着実に川底をふみしめながら、ゆうゆうと渡り切った。徹底とはこの象のような姿をいうのであります——。」

× × × × × ×

私も出来るだけ生徒の感動を呼び起せるような話をと、計画を立て工夫をこらして、いろいろと朝礼のお話しをしてきたつもりであるが、後年、生徒たちの心によみがえるようなものが、いくつあるのだろうか、いや皆無なのかも知れないと今になって、不安や反省の念にかられる。

それから、この話しにでてくる“徹底”ということばをもう一度かみしめたい。

先日、学校給食会の研修視察に参加させていただいた。白河市のある小学校の給食状況をみせていただいたのが、心に深く感動したことがあった。みせていただく前に、その学校の教頭さんから、「私どもの学校では、給食時には、ひと言も話しをしないことになっています」という話しを聞いた。元気盛んな小学生たちが果して無言で出来るのか、と半信半疑で食堂にいった。約300人は入れる大きなランチルームに、こどもたちは整然と列をつくって入場してきた。自分の席につききちんとした姿勢で食事が始まった。食事が終わり、後片づけが始まるまで約30分、こどもたちは全くことばを交さなかった。食事を楽しく、という考え方からすれば、このやり方には異論もあろう。

しかし私は、その“徹底”した姿に感動したのである。よく人は、“徹底”ということばを口にする。それはあまりに安易に使われすぎている。

あの象のような、一步一步底固めをしながら、着実に、一つの成果をつくりあげるべきではないだろうか。

一校一点運動の実践



栃木県中学校長会副会長
足利市立協和中学校長
室 田 廣 三

昨年四月に足利市では教育長より「一校一点運動の実践」の提唱があった。臨教審の第一次答申

においては「改革を推進するための基本的考え方として、個性重視の原則を今次教育改革で最も重視しなければならないものとし……。」と述べられている。その後、教育課程の基準の改善に関する基本的方向についての中間のまとめの前文の中にも、個性を生かす教育の充実を図ることの大切さが強調されている。ここでいう個性重視の考え方は、個人に求められていることと思われるが、学校という一つの組織体においても、この考え方を取り入れることが必要であると思う。勿論それぞれの学校には教育目標があり、その目標具現のため日々の教育活動がなされているわけであるが、本年度足利市の小中校長会として、これらのことを踏まえて、自校の特色を更にはっきり打ち出して実践活動をするに決めた。そしてそれら実践の記録を「特色ある学校づくり」「一校一点運動の実践」として小冊子にまとめて、それをもとに毎月行われる定例校長会議の折、順次発表してお互いの参考にしている。その中からいくつかを挙げてみると、「社会的出番をつくる体験学習」・「瞑想・挨拶・正しい言葉遣いのできる学校」・「全校柔剣道体操」等々いろいろな特色が打ち出されてきた。本校では「チャイムと共に授業が始まる学校」という目標を掲げ、日々実践に努めている。ところで本校では、誰がいうわけではなく、一人の先生が立ち上り職員室を出る。続いてまた一人、いつの間にか授業のある先生の姿が職員室から消える。やがて授業のチャイムが鳴り、学校が静粛になる。こんな光景を見ているとごく当り前の様な気がするが、本校を訪れる多くの方々が驚いて目を見はっている。口で言うのは簡単であるが、毎日実践すると

なると生やさしいことではない。本校では学校課題として「わかる授業」の推進を掲げ、その達成のためにいくつかの具体的な試みを実践している。そしてその最も基本的なこととして、一時間一時間の授業を大切にすることが共通理解され、「チャイムと共に授業が始まる。」が毎日、毎時間行われている。

「生徒指導の基本は学習指導にある。」とよくいわれている。かつて5年程前、学校が大変乱れたことがあった。当時を振り返ってみると、毎日その対策協議や、非行生徒の直接指導で正常な授業ができる状態ではなかった。しかしどんな対策協議をしても一向に良くなる兆しがなかった。最後にたどりついたことは、先生一人ひとりがまず授業を大切にすることから始めようということになり、早速実行に移した。一步前進二歩後退したと思われる日もあったが、騒然としていた学校も一か月、二か月とたつうちに、落ちついていくのが目に見えてきた。どうやら正常な教育活動ができるようになるまでには二か年の歳月を要したが、今にして思うことは、教師一人ひとりが授業を大切にすることが如何に大事なことで、身をもって体験をした。

教師がより研修を深め「わかる授業」をして、落ちこぼれた生徒を作らないよう努力することは勿論大切なことであるが、それ以前の問題として、自ら時刻を守り授業を大切にする姿勢を確立することが必要である。なおこの時刻を守る習慣が徹底し、職員会議をはじめ各種会議も、職員室に時刻を明示するだけで定刻には開催することができる。このような日々の教師の構えが、927名の生徒の言動にもはっきりあらわれ、遅刻する生徒もほとんどなく、落ちついた雰囲気の中で授業が行なわれている。

教育には「時代とともに変化していくもの」と「時代をこえて変わらないもの」があるが、本校で実践している「チャイムと共に授業が始まる。」という良い伝統は永く残したいものである。

第37回全日本中学校長会山口大会に参加して

宇都宮市立城山中学校長 柿 沼 敬 二

雄大な秋吉カルスト台地と心豊かな西の京を背景に、維新の里山口で、第37回全日本中学校長会山口大会が、10月22・23・24日の3日間に亘り、山口県維新百年記念公園スポーツ文化センターを主会場として、全国各都道府県から2,000名を越える参加（本県からの参加者数44名）を得て盛大に開催されました。

今回の研究大会は、これまでの豊かな人間性の育成をはかる中学校教育の深化をめざした研究の成果をふまえ、昨年度の山口大会における「21世紀を拓く日本人を育成する中学校教育」の大会主題を引き継いで、その解明を図ることをねらいとし、

・第1日（10月22日）には、全日中常任理事会、全日中理事会等

・第2日（10月23日）には、全体会に続いての全体協議会での、第1研究協議題（本部提案）「生徒の健全育成と学校経営のあり方」と、第2研究協議題（地区提案）「21世紀に生きる人間像の探究 ― 新しい教育理念の確立をめざして ―」、

分科会では、「1. 21世紀への展望に立った教育課程の検討とその対策」「2. 中学校教育充実のための教育諸条件の整備」「3. 中学校における道徳教育の充実」「4. 健全育成を目指す生徒指導の充実」「5. 能力・適性等に応ずる教育の推進と進路指導の在り方」「6. 地域社会における学校教育の在り方」「7. 学校経営上の諸問題とその対策」「8. 教職員の資質向上と教員養成制度の改善」についての研究協議

・第3日（10月24日）には、文部省への質問事項についての説明、京都大学教授 広中平祐先生の記念講演「今、必要な教育 ― 世界の中の日本 ―」が行なわれました。

私にとって、初めての参加であり、緊張と期待をもって参加しましたが、

・歴史と伝統に培われた山口の教育的風土にふれ、すばらしさと重みをひしひしと感じました。

・教育改革の問題、生徒の健全育成と学校運営の在り方、生徒指導の充実等についての意見発表、研究討議等が熱心に行なわれ、大変学ぶものが多く勉強になりました。

・10月23日夜の、本県参加者による懇親会では、私のような新任者にとっては、県内の校長先生方と知り合うよい機会になり、情報交換や色々教えていただく研修の場として大変参考になった点があり、感謝しております。

・昭和63年度には、第39回全日本中学校長会栃木大会が、宇都宮市で開催される予定になっている関係で、時間をみて、本県中学校長会事務局の方数名と各分科会場の設営や運営の状況等の調査研究をさせていただきましたが、各会場とも行き届いた準備・配慮がなされて円滑に運営されており、大変参考になると共に、我々の責任の重大さを痛感させられました。

以上、今大会に参加させていただいての感想の一端をあげさせていただきました。

大会の雰囲気はふれ、教えていただくこと、聞かせていただくことの多い参加ではありましたが、校長の使命に徹し、腰をすえて、常にたゆまず研修にあたり、一そう意欲的な経営姿勢を示して努めることが重要であり、それが教育改革への道にもつながることであることを強く感じて帰ってまいりました。

研究学校の実践報告

進路発達課題に即した進路学習

鹿沼市立北中学校長 津久井 誠

1. 中学校における進路指導の現状

私はつねづね「進路指導とは、生徒がそれぞれ〝生き方〟を学ぶ教育である」と考えている。もともと人間には夢がある。思春期から青年期にかけて自分の人生を考え始め、どう生きるかを希望と不安の交錯する中で模索する時代である。この時期を十分な密度で生きることにより人間は自立していく。その実現に向っての援助指導が我々教師の役割であると思う。

しかし、現状を見ると義務教育期間で小学校から中学校へなんとなく進級しているし、自分の進路についても、しっかり考え始めるのは中学三年生になってからというのが大多数である。臨時教育審議会も「中学校では個性への配慮が乏しく偏差値偏重の進路指導が行われている」旨の内容を答申しているし、事実、生徒の目的意識の欠如、不本意入学による高校退学者・高校生活不適應者の増加が社会的に注目を集めている。

これらのことから、現在の中学校では本来の目的に沿った進路指導、特に、進路の学習を十分にしていないと言わざるを得ない。

2. なぜ進路学習が行われないのか。

第一に、学級指導の中の進路学習は、進路指導にとって唯一の領域概念であるという重要性を教師が意識していないことである。それは進路学習の時間を他の領域の時間に安易に振り替えてしまうことからもうかがえる。

第二に、進路学習の内容や順序性、即ち、進路発達課題や年計、指導法がはっきりしていないこと、また、それを改善し工夫していく努力が足りないことである。これが進路学習は取りかかりがむずかしいという逃口上になっている。

3. 本校の研究と実践

本校は昭和60年度・61年度の2か年にわたり、栃木県教育委員会から進路指導の実験学校の指定を受け、ただ今研究につとめているところである。

本校は先ず学習指導要領総則の「学校の教育活動全体を通じて、個々の能力・適性等の把握につとめ、その伸長を図るよう指導するとともに、計画的・組織的に進路指導を行うようにすること」の原点にもどり、いかにして〝自分の道を切り拓いていける生徒〟を育成できるかを考え、次のような研究主題を設定した。

研究主題

生徒が自己の進路を意欲的に選択決定し、
将来の生活に適應できる能力
態度を育成する進路指導
～生徒の進路発達課題に即した学級指導
における進路学習を中心として～

問題の第二をまず解決することが第一の問題改革につながり研究主題に迫れるものと考え次のような内容で研究実践をすすめた。

- ① 進路発達課題の自校化……ミネソタ州キャリア発達カリキュラムを分析し、本校生徒の実態を加味し、本校独自の進路発達課題を設定した。
- ② 進路発達課題に即した学級指導における進路学習の年間指導計画の作成……題材、題目の設定、年間指導計画の改善、学習指導案を作成した。
- ③ 学級指導における進路学習の授業の工夫……進路発達課題を促進させる授業の組み立てと生徒を主体的に活動させる指導を工夫した。

4. おわりに
はじめは「また進路学習か」と言っていた生徒達も今では「今日は何の勉強ができるのかな」と授業を待ち望むようになった。教師の進路学習への意欲や教材の工夫が実を結んできたわけである。紙面の都合で、進路発達課題（北中プラン）や年計、授業案、資料等を紹介できず残念であるが、各校からのお問い合わせには極力お答えし、県下中学校の進路指導推進に少しでもお役に立てればと思っている。

同和教育研究学校の指定を受けて

大平町立南中学校長 毛塚 忠 男

本校は、県教委より昭和60・61年の2か年にわたり同和教育研究学校の指定を受け研究実践に取り組んできました。この2年間の歩みを振り返り校長の学校経営という立場よりその一端を紹介いたします。

1. 研究主題設定に至るまでの経過

本校は、大平中の分離校として昭和59年4月に開校した新設校であります。開校2年目の基盤整備と研究推進ということで大変苦労しましたが、幸にして大平町では町内全部の小・中学校が、この10年来学校課題に同和教育を取りあげ、研究の積み重ねがあり、本校職員の大部分の者が大平中で同和教育の経験があるということから、本校の研究主題設定に当っては、次の3点を分析検討することから始めました。①大平中時代に研究実践したことで問題点を洗い出し検討すること。②本校生徒の実態をよく把握すること。③研究学校が終了後も引き続き実践できる地味な研究であること。その結果2学期に入って研究主題が「人権意識を高め、差別を許さない心と行動力をもつ生徒の育成をめざして」と決まり、この課題解決のための指導内容として、(1)人権意識を高め、差別を許さない心づくり、(2)小集団を中核とした認め合い支え合う仲間づくり、の2つの柱をたて、これを支える側面的指導として、(3)1人1人を生かす援助指導、(4)啓発活動の充実、等を取りあげ、本格的な研究実践に入った。

2. 研究組織づくり

研究学校としての特別な組織を作らず、従来からの組織を強化拡充することにしました。まず研究の中核となる同和教育推進委員会ですが研究主任を中心として、校長以下各主任クラス13名で組織し、研究に係わるすべての基本構想と企画がここで練られ、実践の母体である学年部会におおします。本校の研究で最も特色のあるものは、心づくりをするための強化連携指導です。人権に係わる1つのテーマを5～7時間

連続的、集中的に指導し、行動化するまで深めようとする試みであるが、この指導の中心的役割を果たすのは学級担任である。新任教員もベテラン教師も同一資料、同一指導案を用いてどのクラスも同じように深まりのある学習するには、指導案の作成検討、資料の分析、共感的理解を深める手だての工夫、教師の指導力向上のための模擬授業の実施等学年部会で十分に研究する必要がある。そのため主任クラスで学年に所属していない者を、すべてどこかの学年に位置づけ、深まりのある学年部会が運営できるよう強化策を工夫しました。

3. 直接的指導に係わる配慮事項

この2年間の研究を通して、特に配慮した点はこのことでした。授業中の態度や反応を的確にとらえる目をもつこと。そして適切な指導の手だてを、授業後の感想文や日記による対話指導、強化連携指導の指導案や資料についても1時間ごとに、明るい展望につながる授業の展開を工夫してきました。

4. 保護者への啓発活動について

同和教育では、保護者の理解と協力を得ることが不可欠の条件であるが、とかく、これでもか、これでもかと同和問題の抽象論を振りまわしがちになる。研修活動や広報活動に大切なことは、どの生徒にも必要な教育であることを、指導の実践例で示すこと。生徒達の主体的な取り組み、変容の様子等を知らせることを基本においた啓発活動を心掛けました。

この2年間の研究実践を通して、最も強く感じたことは、指導内容や指導方法の研究を深めることは、もちろんのことであるが、それ以前の問題として、教師1人1人の同和問題に対する構えが大切であることを、まず同和問題に対して正しい認識をもち、差別解消に向けての情熱が、生徒達に心によく感じとれること、そして、このような教師の心が、すべての教育活動の1つ1つの中に継続的に生き続けているということ。

開かれた人間関係の育成を目ざして

大田原市立野崎中学校長 長嶋 彬

本校は昭和60年度、61年度の両年にわたり、中学校教育課程研究学校として、文部省ならびに大田原市教育委員会の指定を受けた。

研究主題は、「学校教育全般を通じて、開かれた人間関係を育成するにはどうすればよいか」を設定し、教育課程一般、国語科、理科の研究実践に取り組んできた。

教育課程一般では、授業を通して心のふれあいを深め、開かれた人間関係の改善に努めてきた。各教科の学習は、それぞれの教科の目標を達成するために展開されるわけであるが、学習の過程で開かれた人間関係を育成したり、推進したりしながら生徒が相互に学び合う体験をもたせ、人間関係のあり方を究明してきた。

1. 人間関係とは

人は人とのつながりの上で互いに支え合い張り合いを持って生きていく社会的な存在であると同時に、一人一人の独自の在り方を追求してそれを何らかの形で実現させようとする存在でもあるといわれる。本校の実態調査によると多くの生徒が仲間はずれになりたくない、けれど目立ちたいと望んでいる。

好ましい人間関係とは、表面上相手に合わせるために自己を犠牲にしたり、損得などの「力関係」に敏感になるような上下関係で結びつくものではない。また、独自の存在のみを主張し互いに孤立傾向になり反発心や不安感を生じる関係でもないと考え。

そこで、本校では好ましい人間関係を支えるためには、基本的に次の二つの条件が満たされることが大切であると考えた。

(1) まわりから認められることにより安定感と信頼感の育成

心のふれあう人とのかかわり合いの基本となるものは信頼感である。信頼感は「自分はまわりから認められている」と自覚することから生まれてくるものである。

(2) 個性の発揮による充実感と自信の育成

一人一人が集団からの強い規制を受けないで、のびのびと行動しながら、自分らしさを表現することで、充実感を味わうことができることである。

2. 開かれた人間関係とは

(1) 自分の足りないことを他に求め、助言や批判を素直に受け入れ合う関係。

(2) 自分でやる気を出し、積極的に他に働きかけ、自らの能力を高めながら学び続けることのできる関係。

(3) 集団においては、共に悩み、共に学び切磋琢磨し合いながら一人一人が、成就感を持てる関係。

(4) お互いに認め合い、協力し合い、助け合う学習協同体に高めていこうとする関係。

3. 開かれた人間関係を深めるために育てたい能力・態度

(1) あらゆる活動をするための意欲を身につける。(意欲)

(2) 相手のよいところが認められる能力を身につける。(承認)

(3) コミュニケーションの手段としての話し合いの技能を身につける。(話し合い)

(4) 集団の中で、自己規制しながら個性を發揮しようとする態度を身につける。(個性)

(5) 集団の一員として役割を果たしながら集団のために尽くそうとする態度を身につける。(集団の一員)

以上五つの重点項目を設定し、それを基本にして育てたい能力・態度を研究し人間関係の分析表を作成した。

国語科においては、「文学的教材を中心とした学習の個別化」について研究を進め、一人一人を生かし、伸ばす教育を個別化ととらえ研究を進めてきた。

理科では、個に応じた指導の教材教具の工夫開発に研究の力点をおき17個の教材を開発した。

なぎなたクラブの演技

喜連川町立喜連川中学校長 新井正義

昭和59年度、文部省から格技指導推進研究校に指定され、「生徒選択制を導入した格技(柔道・剣道)の効果的な指導」を研究主題に、3年間実践研究を進めてきたが、10月27日、県内各地から約200人の参会者を仰ぎ、3年間の研究成果を発表した。特に、東日本の公立中学では唯一と言われている女子のなぎなたクラブの演技は参会者に深い感銘を与えた。研究の概要は次のとおりである。

1. 教科体育における格技指導

(1) 保健体育科領域別時間配当

格技の学習効果を高めるとする観点から、格技の指導を1年生に30時間を配当し、柔道・剣道の両方を体験させ、2年生から生徒の能力・適性及び興味・関心に応じて柔道・剣道いずれかを主体的に選択させることにより、格技の技能向上と充実に努めた。なお、2年生に20時間、3年生には16時間の格技指導の時数を配当した。

(2) 時間割編成上の工夫

保健体育科と技術・家庭科との連携を図り、男子のみ学級の枠をはずし、学年を単位として柔道選択者と剣道選択者の二班を編成し、一人の体育教師が柔道・剣道の二種目を指導した。

(3) 格技指導の実践

次のことに重きをおいて指導に当たった。

- ア 格技指導方法の改善と充実
- イ わかる授業の工夫
- ウ 観点別学習状況評価について

2. クラブ活動における格技指導

本校の特色として、柔・剣道クラブの外に、女子のなぎなたクラブを設け指導に当たった。

<なぎなたクラブ>

クラブ員は34名、3年生のリーダーを中心に熱心に練習に励んでいる。公開演技の内容は、
・基本の自然体・体さばき・素振りの上下・斜

め・横・八方振り・打突の振りあげ・面打ちや打ち返し、防具をつけた1～5本の仕掛け・応じ技等であった。

3. 格技指導における関連的指導

(1) 基本的な考え方

格技指導で培われた精神面の良さ(礼儀・規律・克己)を日常生活に生かすことを考えて、関連活動推進班を設置し研究を進めた。その結果、次のような成果を上げた。

- ア 礼儀正しく、あいさつがきちんと出来る。
- イ 時間を守りきびきびした行動ができる。
- ウ 交通安全をはじめとして安全な生活が出来る等。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ・生徒が自分の能力・適性及び興味・関心に応じて、柔道・剣道のいずれかを主体的に選択でき意欲的に学習に取り組むようになった。
- ・格技指導期間中の技術・家庭科の年間計画を1時間単位でも指導可能な領域に変えることにより、一人の指導者でも柔・剣道2種目の指導が可能になった。
- ・格技指導の良さが身について学校行事等の生徒活動が洗練されてきた。

(2) 今後の課題

- ・生徒選択制による人数の片寄りや学習小集団のリーダーの育成をどのように図ったらよいか。
- ・格技指導期間中に、旬の物を生かした調理実習を行うのにはどのようにしたらよいか。

とまれ、3年間の格技指導推進の最大の成果は日常の学習活動が安定して行われていることではないだろうか……。

海外研修視察記

気さくで 陽気な人々に接して

宇都宮市立鬼怒中学校長 渡辺栄一

「待ちに待った憧れのサンフランシスコに今到着し、第一歩を踏み出しました。紺碧の空、限りなく澄み渡る空気、日本では味わえない爽やかさを満喫しております。」……(旅先の第一報より)

私たち、県団20名は、9月22日～10月7日、希望と不安、そして緊張に心躍らせ、アメリカ、カナダ、メキシコの一部を視察研修の機会に恵まれました。団員各位に支えられ、僅かな日数ではありましたが、実際に五感で学んだ事は、その国を理解できたばかりでなく、日本を見直す意味でも有意義であり、同時に貴重な体験を致しました。

いま研修を終えて旅路を振り返り、頭の中をかけ巡る中から2～3記してみます。

1. 時間内に巧みに授業を展開する教師と生徒

日本では「ベル着」と言われているが、アメリカの各学校では、「ベル即授業開始」で、「ベル即離席」である。例えば始めは良いとしても、終りは先生が説明していても、生徒はその席にはいない。良い悪いは別としても、時間内の勝負である。

2. ゴミのない校内

「良き市民になって欲しい。自分に自信を持たせたい。問題が起きたとき、自分で解決していける子にしたい。失敗から学ぶことより、良い経験によって育てたい。」とは校長の言、また校舎内外はきれいである。聞けば、専門の人が清掃しているとか。それにしても、ゴミは散らさない、散れたら拾っている。

日本では「自心清浄」と仏教の影響であろうが、清掃も教育の一つとして指導しているが、ゴミは目につくし、仲々きれいにならない昨今の校舎内外である。

しつけ、性教育の面も各人バックボーンが違うので、一斉指導は無理で個別指導のようである。すべて、自由のように見えても、責任が重く、しかも守らなければならない規則も多い。

3. 最大のみやげ

レセプションの和やかな話し合い。プレゼントの交流……等、生涯忘れることのできないものである。自ら冗談を好み、笑いこぼる優しい、そして親切なアメリカ人……。

その中で教育長さんが「Kids are #1」とプリントされたTシャツを団員の胸にかざしてくれた。

——子どもが一番——何よりも大切という意味であろう。最大のみやげ(収穫)である。

実に気さくで、陽気な人々であるが、「自分に向く仕事がない」と定職を持たず、ごろごろしている人達もいる。妙に重い言葉である。自分の弱さを知りながら、自負心を持つ人もいない訳ではない。

4. 誉める

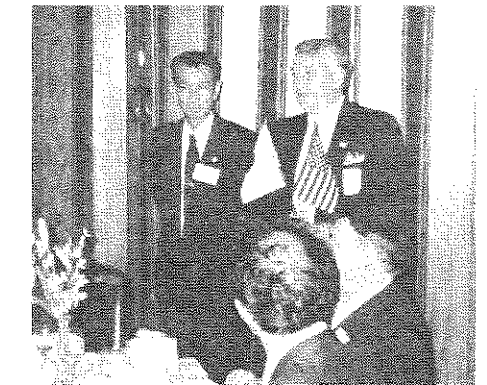
日本の、特に運動の指導者は、選手の欠点を指摘し、叱ることが八割とか、アメリカ人は、誉めることが八割だそうである。

ある通訳の話によれば「音楽の演奏の前に5～6回もトイレに行く子もいる。その場合、早くいってきなさいと軽く流し、音楽の上達を誉め、萎縮させないような配慮が見られる。」という。しかし、日本の場合は「だめね。」といって叱るのみ……反省させられる点が多かった。

原色風景に映し出され、眩感されながら、何とも心地よいメキシコ帰りのハイウエーでした。

~~~~可愛くば、二つ叱って三つ誉め、  
五つ教えて良き人にせよ~~~~  
-先輩の教えから-

今回の研修で多くの子に接した。白人、黒人、アジア系……、そして物を乞うメキシコの子……でも、どの子ども達もなくてはならない、大切な子どもである。



## 地区だより

### 今、芳賀の中学校教育は(芳賀地区)

芳賀は歴史的に興味深い土地柄である。八溝山系の西麓、小貝川や五行川の流域台地に広く分布する縄文・弥生両期の住居跡や古墳群に、限りないロマンを感じる人は多い。また奈良平安時代の芳賀地方経営の拠点となった大内郡衛跡、つわものどもの栄枯盛衰を物語る宇都宮家の地藏院やその墓地、北条氏ゆかりの益子西明寺、関東六条の一つ高館城など土着豪族の哀歓が偲ばれる。江戸期に入ると天領や旗本の所領が多くなった芳賀地方は、分割支配の弊として沈滞の時代が長く続いた。幕末になって農村疲弊の作興を目指した二宮尊徳先生の物部村仕法は有名である。また親鸞上人ゆかりの高田専修寺、勝道上人誕上の地真岡市南高岡など宗教的にも関心を誘う所が多い。

このような誇りとする歴史的風土をふまえて、芳賀の中学教育は多くのすぐれた先達の努力による特色ある教育風土づくりが進められてきた。即ち、質実、忍耐、協力、勤労等の美風を育て、新しい時代への対応能力の向上発展に努め、着々のその成果が実ろうとして今日に至っている。

私達17人の校長は、先輩の遺産をベースに全日中の研究主題「21世紀を拓く日本人の育成」を目指し、全日中、関プロの分科会協議題を参考にして、「学校経営の活性化と校長のリーダーシップ」「教育効果を高めるための諸条件の整備」という2つの小主題を設定し、2班に分かれて年間6回にわたる共同研修の機会を持った。研修は概ね前もって用意された研修内容に応じて、会員それぞれが事前研究に基づく資料を持参し交換して進めるため、常に深みと広がりのある実践的研修とすることができた。この成果を集録化しないが、その内容は各校長の胸に収まってそれぞれの学校の実情に応じた展開を見せている。これというのも生徒指導を中核にした教育課題を共有する同志としての自覚と使命感が17人の校長を連帯させているのだと思う。これによって芳賀の中学校教育は確実に前進していることを申し上げたい。

### 日々研修に糧を求めて(安佐地区)

#### 1. 安佐校長会の組織

安佐校長会は、佐野市立中学校6校と安蘇郡

田沼町立中学校2校、葛生町立中学校2校の1市2町10校から組織されている。

#### 2. 研修活動と内容

研修活動は年8回実施しており、本年度の研修課題は県中学校長会の主題を受け、中心課題を「学校経営上の諸問題とその対策」とした。特にその中で下記の問題をとりあげ研修を進めてきた。(1)教職員の指導の問題

(2)生徒指導上の問題

(3)部活動指導の問題

(4)生涯教育の問題

他に日帰りによる学校経営研究調査を実施しているが、本年は11月14日茨城県水戸市の中心にある水戸市立第二中学校を視察した。「生徒理解を基調とした望ましい学年・学級経営のあり方」を課題として全校的な実践研究に取り組まれ実績をあげていた。

#### 3. 足利・安佐合同中学校長研修会

隣接市である足利市立中学校11校の校長会と合同研修会を年に一回実施している。本年は、「中学校経営上の問題点と特色ある学校づくり」をテーマに活発な情報交換を行い大変有意義な研修会であった。なお研修会終了後は懇親会を開き親睦も図っている。

#### 4. 管外優良校実情調査

県外視察研修として優良校実情調査を毎年実施している。本年は12月11・12日の一泊二日、静岡県三島市立南中学校を視察した。この学校は昭和59・60年文部省指定の道徳研究学校である。目標を「学校における道徳教育は教育活動全体を通して行うことを基本とする」の原則をふまえ、さらに、道徳の授業において補充・深化・統合することにつとめている実践校であった。

## あ と が き

### 謹賀新年

おだやかな新年を、皆様お健やかに迎えしましたこと、御同慶の至りです。

第三学期出発、整理の時です。立つ鳥跡を……のとおり、よろしくお祈りします。

遅くなりましたが第66号をお届けします。年末御多忙の折の原稿書きに心からお礼申しあげます。